

今週の為替相場見通し(2023年8月21日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		144.65 ~ 146.56	145.41	144.00 ~ 147.00
ユーロ	(ドル)		1.0845 ~ 1.0965	1.0873	1.0600 ~ 1.1000
(1ユーロ=)	(円)		157.68 ~ 159.30	158.01	155.00 ~ 159.00
英ポンド	(ドル)		1.2617 ~ 1.2788	1.2736	1.2500 ~ 1.2900
(1英ポンド=)	(円)	*	183.47 ~ 186.47	185.15	182.00 ~ 188.00
豪ドル	(ドル)		0.6365 ~ 0.6521	0.6405	0.6250 ~ 0.6480
(1豪ドル=)	(円)	*	92.79 ~ 94.87	93.11	90.50 ~ 95.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替営業第一チーム 尾身 友花

(1) 今週の予想レンジ: 144.00 ~ 147.00 円

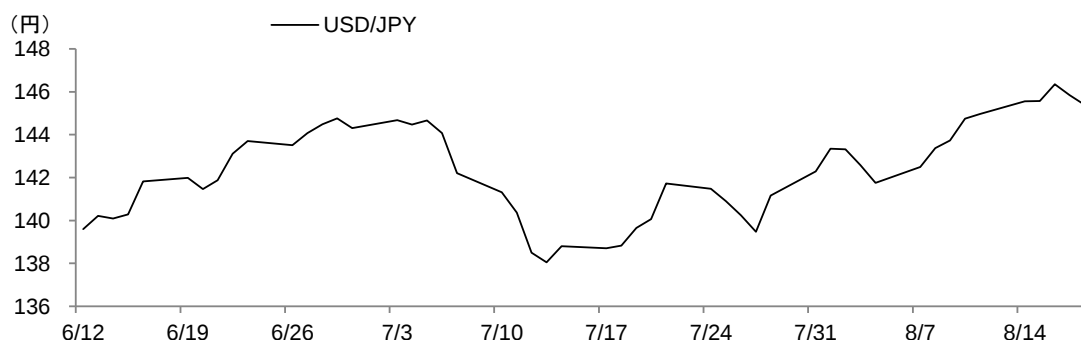
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は、続伸して年初来安値を更新する展開。週初14日、144.86円でオープンしたドル/円は、日本株の堅調推移を横目に145円台に上昇。海外時間は、日本株上昇が一巡し反落したが、中国経済に対する先行き懸念でリスク心理が悪化したことでドルが選好され、145円台半ばまで上昇した。15日、ドル/円は本邦4~6月期GDPが予想を上回る結果となるも、市場の反応は限定的。海外時間は、米国経済指標の結果が強弱まちまちの中、145円台前半を方向感無く推移した。16日、ドル/円は日本株の軟調推移もあって上値が重い展開だったが、海外時間にかけて、米7月鉱工業生産が市場予想を上回ったこと、中国経済の不透明感からドル/人民元が上昇したことで、ドル/円相場も連れ高となり、22年11月以来となる146円台に乗せ、146.40円まで上値を伸ばした。17日、前日の流れが継続し、年初来高値の146.56円を記録したが、海外時間にかけては米金利低下とともに円の買い戻しも散見され、終盤にかけてはやや粗い値動きとなった。週末18日のドル/円は145円台にて上値重く推移した後、海外時間には米金利の上昇が一服するに連れ下落幅を拡大し一時145円を割り込む場面も見られた。終盤はやや持ち直し、145円台前半にてクローズした。

今週のドル/円は週末にジャクソンホール会議を控えて動きづらい相場展開を予想する。先週は米指標や米金利の底堅さに支えられてドル/円は一時年初来高値を更新する場面も見られたが、週末にかけては上昇が一服した。ドル/円相場における注目は今後の米国の利上げ動向だと考えているが、今週末のジャクソンホール会議でのパウエルFRB議長発言にて更なる利上げ継続の方針が読み取れば一段のドル高も排除できないだろう。いずれにしろ週末の会合にて今後の方針を読み取りたい向きが多いと見ており週末までは大きな方向感が出づらいだろう。また、今週は、22日(火)米7月中古住宅販売件数、23日(水)米8月各種PMI速報値、米7月新築住宅販売件数、24日(木)米7月耐久財受注、24日(金)米8月ミシガン大学消費者信頼感指数、パウエルFRB議長講演が予定されている。経済指標が盛り沢山の週なので、週末のパウエルFRB議長の講演までは、指標の結果に一期一憂する相場展開になりそうだ。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/14~8/18)の値動き: 安値 144.65 円 高値 146.56 円 終値 145.41 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 為替営業第二チーム 逸見 久貴

(1) 今週の予想レンジ: 1.0600 ~ 1.1000 155.00 ~ 159.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは下落。週初14日、1.0944でオープンしたユーロ/ドルは、特段目立った材料ない中、米国時間にかけて米長期金利が9か月ぶりの高水準をつけると、一時1.08台後半まで下落した。15日、中国のサプライズ利下げを受けリスクオフ地合いとなると一旦1.0901まで下落するが、その後はユーロ/円が下げ渋り、下値がサポートされる展開。その後、米7月小売上高の結果を受けて一時1.09台を割り込む場面も見られたが、ユーロ/円上昇と米金利低下を受けて1.09台前半を底堅く推移した。16日、ユーロ/ドルは、1.09台前半を中心に小幅な値動きとなったが、米国時間に公表された7月FOMC議事要旨が改めてタカ派色の強い内容であり一時米短期金利が5%に近づくと、ドル高が進行し、ユーロ/ドルは再度1.09を割り込む展開となった。17日、ユーロ/ドルはドルの底堅さを受け軟調地合いが続くも、米国時間は米株下落を背景とした米金利低下に一時1.09台を回復。その後は米金利が切り返す動きを横目にドル買い優勢となるとユーロ/ドルは反落し、1.0857まで下落した。18日はユーロ/円が下落する動きに連れられてユーロ/ドルも上値重く推移。NY時間に米金利が上昇すると週安値1.0845をつけ、終盤にかけて小幅に値を戻し、1.0873で越週。

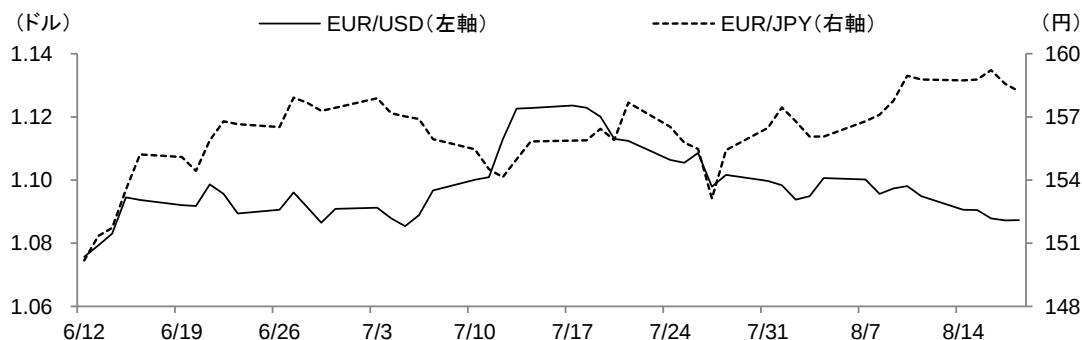
今週のユーロ/ドルは軟調な推移を予想。7月ECB政策理事会では+25bpの利上げを決定したものの、声明文が利上げ局面終了の可能性を示唆する内容となり、さらにラガルドECB総裁のスタンスもタカ派後退が意識されたことで、欧州の利上げ継続シナリオが崩れている。一方で米国は早期利下げ期待が後退し、米債格下げの余波も相俟って、米金利は高止まり。欧米金利差が拡大する中、ユーロは先月つけた1.1276を高値に下落トレンドが継続しており、日足の短期移動平均線が中期移動平均線を下抜けるデットクロスが発生している状況下、引き続きユーロに下落圧力がかかり易い恰好。今週は欧州圏の製造業/非製造業PMIや消費者信頼感指数、独4~6月期GDPなどの発表を控え、冴えない結果が続けば、欧州経済の失速を通じ、ECBの利上げ停止が意識され易く、ユーロの軟調な推移が想定される。加えて足許では中国経済への警戒感が高まりを見せており、日米対比影響を大きく受ける欧州には特にネガティブな話題。ユーロは引き続き上値重い展開であろう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/14~8/18)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0845 高値 1.0965 終値 1.0873

(対円) 安値 157.68 高値 159.30 終値 158.01



(資料)ブルームバーグ

3. 英ポンド

欧州資金部 中島 將行

(1) 今週の予想レンジ: 1.2500 ~ 1.2900 182.00 ~ 188.00 円

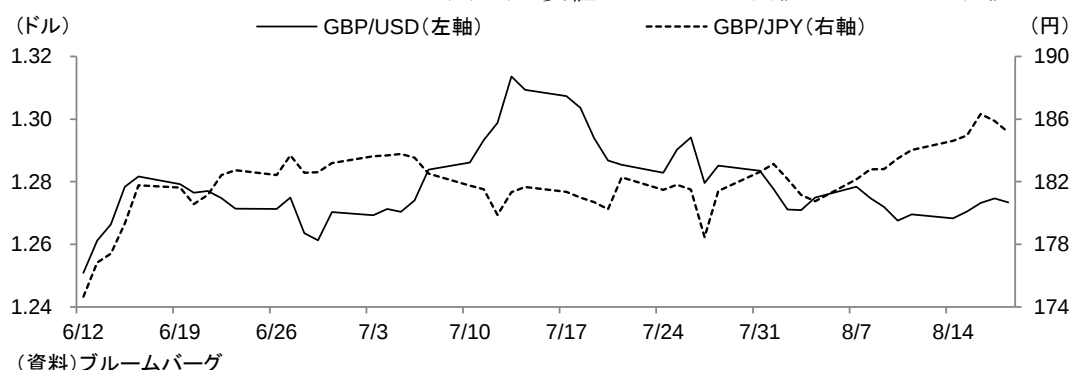
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間の英ポンド相場は先週末の終値が対ドル1.2697に対し8月18日の終値は1.2736と約1.0%の上昇となった。先週1週間は、中国景気を巡る懸念や米債利回りの上昇を背景に幅広い通貨に対してドル高が進んでおり、対ドルで上昇した英ポンドは、G10通貨の中では非常に底堅さが際立っていた。対円では184円前後から185円15銭まで1円以上上昇している。先週1週間は重要な経済指標が複数発表されたが、8月15日に発表された労働市場関連統計は「刮目」であった。特に週平均賃金(賞与除く)は2023年4~6月期に前年同期比で7.8%上昇したことは大きな驚きである。これは2001年の統計開始以来の高い伸びで、エコノミスト予想の7.4%を上回った。3~5月の値も7.5%に上方修正された。もっとも、雇用者数は2023年4~6月期に前期比で6.6万人減少したほか、6月分の失業率は4.2%と5月分の4.0%から上昇したことを踏まえれば、統計全体で見れば必ずしも全てが強かったわけではない。それでも、イングランド銀行(BOE)は高インフレの粘着性を判断するうえで、賃金の上昇率の高さを重視する可能性は高く、今回の統計はBOEの追加利上げの可能性を一段と高めたと見られる。実際に、統計発表後、ポンドは上げ幅を拡大。来月の+0.25%の利上げと来年3月までにさらに+0.5%の追加利上げを完全に織り込んだ形だ。翌8月16日に発表されたCPI(7月分)もBOEの追加利上げ観測をサポートするものとなった。ヘッドラインの値は前年同月比+6.8%と、6月分の同+7.9%からは鈍化したものの、市場予想の同+6.7%を上回った。さらに、食品とエネルギーを除いたコアCPIは、低下を見込んでいた市場予想に反して前年同月比+6.9%と横ばいだった。賃金上昇圧力を背景に、サービス品目の価格上昇が続いていることが影響している。一方、8月16日に発表された小売売上高(7月分)は前月比▲1.2%と落ち込んだ。7月は雨がちで肌寒かったことが影響している可能性は高いが、変動金利の住宅ローンを抱える世帯が金利上昇に伴い負担が重くなっていることが影響している可能性もある。当面はBOEの利上げ局面が続く公算が強まっているが、金利上昇による英国景気の減速リスクはやはり意識する必要があるだろう。

今週1週間の英ポンド相場は上値の重い展開となりそうだ。最大の焦点はジャクソンホール会議であり、8月25日のパウエルFRB議長の講演は重要である。インフレ抑制に向けた決意を示し、市場に燦る利上げ停止、早期利下げ観測を諫める可能性が高い。また、市場では中国景気の先行きに対する懸念が強まっているが、今週1週間は英国経済にとって重要なユーロ圏の動向にも注意を払う必要があるだろう。23日に8月分のユーロ圏PMI速報値、25日に8月分のドイツのIFO景況感指数が発表される。23日の英国の8月分のPMI速報値も重要だ。一連の欧州の景気指標が悪化すれば、世界経済の減速懸念が一段と強まり、「米国一人勝ちのドル高」の流れが強まりそうだ。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(8/14~8/18)の値動き: (対ドル) 安値 1.2617 高値 1.2788 終値 1.2736
(対円) 安値 183.47 高値 186.47 終値 185.15



4. 豪ドル

金融市場部 為替営業第二チーム 鈴木 智大

(1) 今週の予想レンジ: 0.6250 ~ 0.6480 90.50 ~ 95.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

週初14日の豪ドルは0.6495でオープン。中国の景気後退懸念の強まりを背景に、人民元を中心に進んだドル買いの流れに押され0.64台半ばまで下落。その後堅調な株式市場の動きもあり、値を戻して引けた。15日はRBA議事要旨での「打倒な時間枠の範囲内でインフレ率を目標に戻すには、更なる引き締めが必要になる」との内容で、追加利上げに含みを持たせたことからやや上昇。一連の流れで一時週間高値となる0.6521まで値を上げたものの、中国経済指標の弱い結果や米銀格下げ警告報道を受けたリスクオフ地合いに、元の水準まで反落した。16日はしばらくは0.64台半ばを中心にした推移。その後FOMC議事要旨で示された継続的なタカ派姿勢を背景としたドル買いに押され、0.64台前半まで下値を拡大した。17日は豪7月雇用統計の予想を下回る結果に豪ドル売りが強まる中、一時週間安値となる0.6365まで下落。その後中国当局者の牽制発言を受けたUSD売りを背景に上昇に転じ、0.64台半ばまで値を戻す場面も見られたが、上値は重く0.64ちょうど近辺まで下落した。18日は再度中国当局から牽制発言があったものの、上値の重い状況は変わらず。その他に特段材料のない中、0.64ちょうどを挟んだ推移が続き、0.6405で越週した。

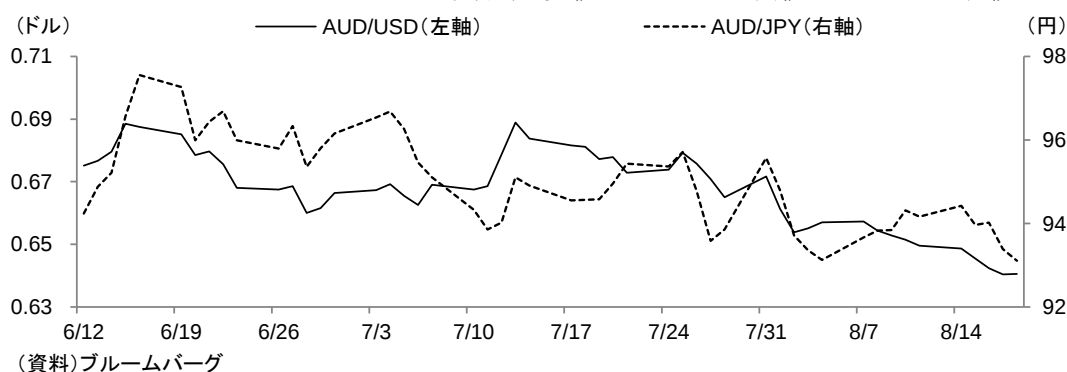
今週の豪ドルも軟調な推移になることを予想する。RBA議事要旨では追加利上げに含みを持たせる内容が示されたものの、その後に発表された豪7月雇用統計は、雇用者数、失業率ともに予想を下回る結果。引き締めの影響が顕著に出ている状況であり、早急な追加対策を催促するような結果ではなかったと思われる。豪州と同様に、必要であれば追加引き締めを検討する姿勢を崩さない中でも、堅調な雇用、経済状況が続く米国との格差は大きく、豪ドルの下押し圧力は継続すると考えられる。また中国経済の停滞も懸念材料。急速に進む人民元安に対しては、当局の対策が目立ってきてはいるものの、軟調な経済指標や不動産セクター、個人消費を中心とした景気停滞は紛れもない事実。経済の結びつきの強い豪州への影響は大きく、こちらも豪ドル売りを助長する材料となるだろう。今週注目のイベントとして、23日(水)の豪8月製造業PMI速報、サービス業PMI速報の発表、24日(木)から週末にかけてはジャクソンホール会議が予定されている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/14~8/18)の値動き:

(対ドル) 安値 0.6365 高値 0.6521 終値 0.6405

(対円) 安値 92.79 高値 94.87 終値 93.11



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。